

Title	内モンゴル自治区発現の突厥文字銘文と陰山山脈の遊牧中原
Author(s)	鈴木, 宏節
Citation	内陸アジア言語の研究. 2013, 28, p. 67-100
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69755">https://hdl.handle.net/11094/69755</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 内モンゴル自治区発現の突厥文字銘文と 陰山山脈の遊牧中原

鈴木 宏 節

## 1. はじめに

遊牧民史上最古の独自文字として知られる突厥文字（テュルク＝ルーン文字）が刻まれた突厥碑文は、従来、ゴビ沙漠以北、漠北のオルホン河流域を中心とするモンゴル高原、イェニセイ河流域、バイカル湖周辺、アルタイ山脈地域、東トルキスタン、タラス河流域などでその存在が確認されてきた。なかでもモンゴル国の中西部を流れるオルホン河の上流域には、8世紀前半に建立されたキョル＝テギン碑文、ビルゲ＝カガン碑文などが現存している。発見地にちなんでオルホン碑文と呼ばれるこれら史資料群は東洋学・トルコ文献学の主要な研究対象となり、これまで幾多の研究が生み出されてきた。殊にこの十年来はオルホン渓谷が世界遺産に登録されたことも相俟って歴史学のみならず他分野からも関心が寄せられている。

さて、モンゴル高原はゴビ沙漠をはるか南北に横断する広がりをも有している。本稿では、ゴビ沙漠の北、漠北と呼ばれた高原地帯、すなわち現在のモンゴル国を中心とした乾燥ステップ地帯を北モンゴルと呼称する。他方、漠南と呼ばれたゴビ沙漠以南の高原地帯、現在、中華人民共和国内モンゴル自治区の領域とほぼ重なる乾燥ステップ地帯を南モンゴルと呼称する。従来、突厥碑文を残した古代トルコ帝国、すなわち突厥可汗国（第一可汗国 552～630年／第二可汗国 682～744年）ならびにウイグル可汗国時代（744～840年）における考古遺跡とえば、北モンゴル現存のものが主たる分析対象となってきた。そして、それにひきつづいてカザフ平原、東トルキスタン、ア

ルタイ山脈地域などの遺跡が取り上げられてきた [cf. 王・祁 1995; 林 1999; Stark 2008; 劉 2012; 陳 2013]. このような学界動向に連動して、文献歴史学においても遊牧民の本拠地と言えば北モンゴルが想起されることが多い [cf. 羅 2012]. その一方で、南モンゴルもまた古来より騎馬遊牧民族が活躍する舞台として注目されることがあった [cf. 松田 1944; 吉田 1980]. しかし、古代トルコ時代における南モンゴルの考古遺跡については、北モンゴルのそれに比してほとんど学術報告がなされていないのが現状である。そもそも突厥碑文という文字史料の存在が南モンゴルに想定されておらず、そこでの遊牧民の活動を具体的に考察することが困難だったのである<sup>(1)</sup>。

ところで、古代トルコ時代の史料中にはカラ=クム／黒沙と呼ばれる古地名があり、南モンゴルにおける突厥可汗国の中心拠点としては例外的に文献史学の考察対象となってきた<sup>(2)</sup>。拙稿 [鈴木 2011] では、考古遺跡の情報などを援用してその地理比定を進展させ、黒沙が漠南における突厥の本拠地として地政学的に重要な役割を担っていたことを解き明かした。筆者はそれに平行して、上述のような研究動向を打開すべく、南モンゴルでの現地調査を数次にわたって重ねていたが、まさにその最中の 2010 年、中華人民共和国内モンゴル自治区包頭市の達爾罕茂明安聯合旗で突厥文字銘文の発見が報告された。漠南における突厥文字史料の存在がはじめて確認されたのである。

- 
- (1) 岩佐精一郎氏は漢籍ならびに突厥碑文をもちいて、突厥可汗国の復興の舞台を漠南に求める先駆的な業績を遺している [岩佐 1936]. その後、突厥碑文に記録された古代トルコ語の地名を地理比定しようとする試みは散発的にはあったものの [ex. Bazin 1982; Tezcan 1995], 突厥可汗国の拠点として漠南地域を重視する議論は、次註でも言及するカラ=クムを扱ったツェグレーディ氏の論考 [Ceglédy 1962] を除けば、拙稿 [鈴木 2006, 2011] や朱振宏氏の論考 [朱 2012] に至るまで長らく現れなかった。なお、羈縻支配時代 (630 年～680 年代初頭) に唐朝によって設置された単于都護府については専著もあり [王 2006], 考古遺跡・資料に依拠した地理比定にも成功している [cf. 石見 1992; 齊藤 2009].
- (2) カラ=クム Qara qum は古代トルコ語で「黒い沙漠」の意があり、漢文史料には「黒沙」と記録されている。その地理比定については拙稿 [鈴木 2011, pp. 39-41] や、そこで引用した諸先行研究 [ex. 岩佐 1936; Ceglédy 1962; 巖 1985; 芮 1998] も参照されたい。

本稿では、この新発見の突厥文字銘文を実地調査に基づいて検証するとともに、古代トルコ時代の南モンゴルの位置付けについて今後の研究の見通しを述べたい。

## 2. 銘文の来歴と現存状況

### (1) 銘文の来歴

件の突厥文字銘文は 1998 年に地元の牧民によって発見された。その後、2004 年にダルハン・モーミンガン聯合旗人民政府顧問の孟克徳力格爾氏<sup>ムンフデルゲル</sup>によって写真に取められ、それが 2010 年の編著『達爾罕茂明安聯合旗歴史文化遺跡』(以下『達茂旗』と略す)に掲載された。同著は旗内の文化財を紹介するアルバムで、百霊廟鎮の草原文化館に所蔵されている 2 体の石人のほか、2 基の石人伴出遺跡の存在が確認できる点で貴重なものである。そして本銘文の写真も 2 枚掲載されている [『達茂旗』 p. 41]。ただしそれぞれサイズが小さかったり、拡大写真が文字と正対していなかったりと、銘文の判読に堪えるものではない。キャプションでも「查干敖包蘇木突厥文石碑」<sup>ツァガーンオボエソム</sup>と地名が添えられたのみであり、その詳細についても一切記述がない。また、簡単な遺跡分布図も掲載されているが、それらの地名を照合させて所在地を特定することも不可能である。

上掲『達茂旗』の刊行直後、銘文を実見調査した内蒙古大学の包文勝・ハスバートル<sup>ハスバートル</sup>・白玉冬<sup>バクムツウ</sup>の三氏によって簡単な学術報告が『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』に掲載された [包・ハスバートル・白 2010]。この報告によって初めて件の「查干敖包蘇木突厥文石碑」<sup>ツァガーンオボエソム</sup>が達爾罕蘇木<sup>ダルハン=ソム</sup>(旧 查干敖包蘇木)の南約 2.5 km に所在することが明らかにされた。その他、本報告では発見の経緯のほか、銘文のサイズやタムガの存在にも言及されている。ただし予備報告であるため、銘文のテキストや写真図版などは掲載されていない。

その後、2012 年、白玉冬・包文勝の両氏による銘文の総合的な考察が『西北民族研究』に発表された [白・包 2012]。ここでは銘文の名称は「查干敖包銘文」とされ、所在地や銘文の状態などが詳細に報告されたほか、テキス

トの翻字にローマ字転写と翻訳が掲載され、銘文の歴史的な位置付けについても検討がなされている。ただし2012年9月2日に筆者が現地調査を行ったところ [鈴木 2013, p. 24], 彼らの銘文読解には修正すべき点が多いことを確認することができた。また南モンゴルでは初の発見となる突厥文字銘文の形態を把握するためにも、改めて写真図版を示す必要を実感した。そこで、節を改めて銘文の所在地を紹介し、その現存状況を解説することにした。

## (2) 銘文の現存状況

銘文は内モンゴル自治区包頭市のダルハン・モーミンガン聯合旗に現存している。包頭市は内モンゴル自治区の中西部にあり、その管轄に属するダルハン・モーミンガン聯合旗は北辺がモンゴル国と接壤する国境地帯にあたる [図1]。そして、この聯合旗の中心である百霊廟鎮から東北約38 km (路面距離では約45 km) にあるダルハン=ソムの草原内が銘文の所在地である。前節で述べたように先行研究では「査干敖包<sup>ツァガンオボ</sup>」という旧称を冠しているが、本稿では現行の行政単位名をとって「達爾罕蘇木<sup>ダルハン=ソム</sup>銘文」と呼称することにする。



図1：ダルハン・モーミンガン聯合旗  
包頭市内の斜線部分 ● = 百霊廟鎮

さて、このダルハン=ソムの政府が立地する中心部から東南に2.5 kmほど離れたゆるやかな東向き斜面の中腹に銘文が現存している [Plate I]。そこは東西2 km、南北1 kmほどの広がりのある盆地、平皿状草原の縁にあたり、高さ2 mほどの孤立した岩塊が直立している。この岩塊の東面に銘文が刻まれているのである。ちなみにこの岩塊から東方を見下ろすと直径50 mほどの湖沼があり、逆に西方に見える丘陵の頂きを眺めると聯合旗政府の白い庁舎を視界に収めることができる。

銘文の刻まれた岩塊は自然岩の露出であり、大小似たような露出はこの草原の周辺一帯でいくつも目にするのができ、規模の大きなものには古代岩画が刻まれているケースもある [cf. 蓋 1989, pp. 4-214 (推喇嘛廟一帯岩画)]。この岩塊は孤立した石柱のような形態を呈しており、その高さは150~190 cmである<sup>(3)</sup>。側面はいずれもほぼ平らになって東西南北を向いており、各辺の幅は100~150 cmほどであった。このうち東面には地面に対して斜めに亀裂が走っており、左右に岩が割れてしまっているのがわかる。この岩の間にできた溝に沿って突厥文字が刻まれている [Plate II]。

ところで、東面に向かって右手の石片は、頭頂部から約70 cmのところまで水平方向に亀裂が走っており、上下にも岩塊が割れているようである。この下片が刻文面にあたるが、上辺50 cm、下辺70 cm、左辺105 cm、右辺85 cmほどの面積がある。

その上辺部に岩画が描かれている。同じ意匠の右を向いた山羊が2頭列んでいるが、いずれも彫りが浅く肉眼でも写真でも見にくいため、現地でも2頭分をトレースし補足した復元図を示すことにする [図2]。

この動物意匠は南モンゴルの岩画研究で北山羊 (*Capra ibex*) に分類される

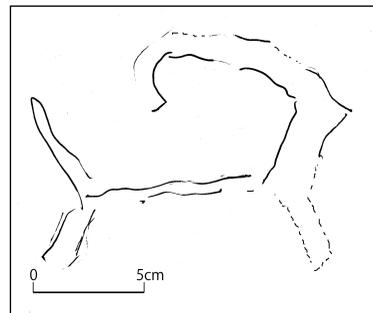


図2：岩画の復元図

<sup>(3)</sup> 以下、銘文が刻まれた岩塊の計測値については [白・包 2012, p. 79] を参照した。

ごく一般的なもので、近隣の推喇嘛廟岩画群でもいくつか観察することができるので [ex. 蓋 1989, p. 59, 図 242-243, p. 73, 図 310, p. 91, 図 396 etc...], 突厥文字銘文に先行して彫られたものと推測される。ちなみに、突厥の王族である阿史那氏のタムガによく似ているのだが、その場合は必ず左向きであるため、ここでは全く問題にならない。

さて、突厥文字は前述した岩塊の東面を走る亀裂に沿って 11 文字が視認できる [Plate II & 図 3]。文字のサイズは縦 4~6 cm × 横 2~4 cm 程度である。文字は岩壁銘文でしばしば見られるただの線刻ではなく、0.5~1 cm ほどの幅がある。そして、岩塊の表面を仔細に観察すると、風化による剥離が進んでおり、赤褐色の層、黒色の層、灰色の層が重なって見える。このうち表面の大部分を占めるのが灰色の層である。文字を彫った痕跡が浅くではあるが黒々と残っているのが特徴である。灰色と黒色の層が重なった部分に銘文が刻まれたからであろう。なお、突厥文字の字体は各地の岩壁や岩塊に刻まれているものと同様であり、オルホン碑文のように平らに整形された碑面に刻まれる整然としたものではない。

ところで 7~8 文字目に隣接して、白・包両氏がタムガであると主張する描線が確かに見えている [白・包 2012, pp. 81-82, 86]。この描線は上述した 2 頭の山羊の岩画とは異なり、銘文と同時に作成されたと思しき痕跡である。これをタムガの一種とみなすことには肯首できよう。しかし、両氏が想定する阿史那氏の象徴である山羊型タムガをここに見出すことはできなかった。

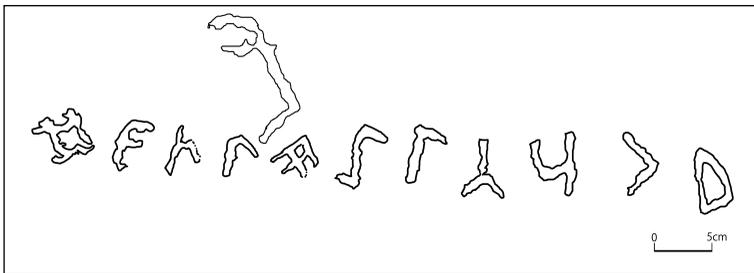


図 3：銘文のトレース

突厥文字は右から左へ読み書きする。  
そのため反時計周りに 90 度回転させた。

### 3. 銘文のテキスト

それでは銘文を解読してゆきたい。本稿では註釈も含めて翻字・転写方式を〔森安・鈴木ほか 2009, p. 7〕の突厥文字ローマ字対照表に依拠している。なお、ローマ字転写では下線を用いて翻字で表記されない母音類を示した。翻訳における（ ）は解釈のために意味を補足した部分である。

#### 《翻字》

YWRčia bitgm

#### 《転写》

yorčī a bitigim

#### 《翻訳》

(私は) ヨルチ。おお！(これが) 私の銘文(である)。

#### 《語註》

**yorčī**：白玉冬・包文勝の両氏は、テキスト全体を QWRčīnbsigim と翻字して qurčī bān sigim と転写している。そして、この第1語目の qurčī については、名詞 qur「腰帯」に接尾辞-čīが附属した単語を造語して「騎士」と翻訳した〔白・包 2012, p. 80〕。しかし、冒頭の文字が Y と読めることは明らかであり、両氏の翻字と転写はともに修正されるべきである。

さて、修正された翻字から推測される単語は yurčī あるいは yorčī である。このうち前者の yurčī については、yurč「義弟」という一般名詞が在証されており〔ED, p. 958〕、それに三人称の所有接尾辞-iが附属したものと解読できるので「彼／彼らの義弟、その義弟」となる。しかし、これでは次に来る単語と併せて全体の文脈を成り立たせることができない。

一方、後者の yorčī については、ДТC に項目が立てられている〔p. 274〕。ところが典拠として挙げられているマフムード=アル=カーシュガリー『トル

コ語辞典』には管見の限り用例が見当たらない。ДТС の訳語が「проводник（案内人，ガイド）」である点から察するに，yol「道」の派生名詞 yolčï の誤りであったと思われる。

それでは yolčï がトルコ語としてまったく在証されていない単語かと言えばそうではなく，ラドロフ氏のトルコ語方言辞典には「наездник——der Reiter（乗り手，騎手）」という意味のクマン語の単語として登録されている[VWTD III, p. 428]. クマン語史料群は突厥碑文が建立された時代からかなり下った12～16世紀のものであり，はるか西方の南ロシア地方で残されたものであるから，本銘文の単語とは直接の関わりを持たないかも知れない。さらに突厥碑文——例えば，トニユクク第一碑文・西面4行目，同・東面7行目，ビルゲ=カガン碑文・南面1行目——では同じ意味の単語として atlır がもちいられているからである [cf. GOT, p. 305 ; ED, p. 55].

以上から，本稿は1語目を yolčï と再建するが，これを一般名詞とは解釈せず，古代トルコ語の人名「ヨルチ」とみなす。次々註で引用する例文などから類推されるように，ここに固有人名が記載されることを期待できるのも理由のひとつである。

**a :** 白・包両氏は6文字目を n と読んで，これに続く7文字目の b と逆順になっているとみなし，一人称単数形の主格 bän を復元しているが [白・包 2012, p. 80]，従えない。6文字目は n ではなく a と翻字し，感嘆詞として解釈すべきである [cf. GOT, p. 174 ; OTG, pp. 162-163].

**bitigim :** 白・包両氏は，sigim と再建して，モンゴル語の分詞 sig にトルコ語の一人称単数形の所有接尾辞 -m が接続した単語を想定した [白・包 2012, p. 80]。しかし7文字目 b の次には t, i の2文字を判読できるので，後続の文字と併せて bitigim と再建すべきである。これは名詞 bitig 「書いたもの；本，手紙，銘文，文書」[ДТС, p. 103 ; ED, p. 303] に一人称単数形の所有接尾辞が附属した形である。従って「私の銘文」という意味になる。

ここで本テキストに類似する突厥文字銘文が幾つか想起されるが，まず，北モンゴルの例としてゴルバルジン=オールの岩石銘文が挙げられる。そのテキストには，täŋri qulï : bitidim : 「テングリ=クリこと私が書いた」とあり

[Кляшторный 2003, pp. 274-275 ; Бичээс II, p. 115], 自分の名前を銘文に書き残す際に、動詞 *biti*-「書く」を用いていたことがわかる。また、やや北方で確認された例であるが、以下の2銘文がある<sup>(4)</sup>。第一に、トゥバ共和国ウルグ=ヘム河南岸のバイ=ブルン第一銘文(E-42)があり、その4行目の *sanγur čad bitidim* 「(これは) サングル=チャドこと私が書いた(刻んだ)」という例がある [Васильев 1983, p. 29-30 ; Кормушин 1997, pp. 167-168]。第二に、アルタイ共和国オングダイ地区のカルバック=タシュ第十九銘文(A-42)があり、*bertip aka bān bitidim a* 「(これは) ベルティップ=アカこと私が書いた(刻んだ)、ああ！」という例がある [Кызласов 2002, pp. 117-119 ; Тыбыкова / Невская / Эрдал 2012, pp. 85-86]。後者は感嘆詞も含んでいる。

以上の3例は動詞 *biti*-を用いている点で、その派生名詞 *bitig* を用いる本テキストとは異なるが、直前に固有人名を明記する構文は共通している。恐らく、本テキストもこのような性格の銘文に類するものであろう。そして、銘文の書き手が語らんとしている要点は、問題となっている突厥文字の銘文そのものが自らの手になったということである。すなわち本テキストの主張点を端的に述べれば、この岩塊への書き付けこそがヨルチ自ら自分の名前を刻んだ銘文であるぞ、ということである。

#### 4. 銘文の位置付けをめぐる

##### (1) 銘文の成立背景

前節では先行研究によるテキストを大幅に読みかえた。当然、銘文の位置付けも見直さなければならない。白玉冬・包文勝両氏は、銘文の傍らに添えられたという山羊型のタムガならびにオング碑文で見られる逆「し」の字型の図案の組み合わせから判断して、突厥可汗国の王族・阿史那氏傍系の間人が追悼されている銘文とみなした [白・包 2012, p. 83]。ところが既に第2章第(2)節で指摘したように、山羊型タムガを岩塊に見出すことはできなかった。

(4) 銘文の類例についてはトルコ共和国アタテュルク大学の Cengiz Alyılmaz 氏のご助言を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

また、両氏は、7世紀末葉から8世紀初頭にかけて突厥可汗国が陰山山脈一帯で復興を遂げたことを根拠にして、本銘文の作成年代をその期間にかかるものと考察している〔白・包2012, pp. 83-86〕。しかし、本銘文の成立を突厥碑文の最初期に位置付けるこの見解も、テキストの解読が修正され、かつ山羊型タムガの存在が否定された今や成り立たない。これまで示したように、銘文にもタムガと思しき意匠にも年代観の手掛かりとなるような要素が含まれていないのである。我々は一般に知られているように、突厥第二可汗国における突厥碑文の成立年代——720年以降あるいは武人宰相トニユククの碑文の成立と推測されている725年以降〔cf. GOT, p. 11; 護1976, p. 125〕——を前提にしないでならない。すなわち本銘文も720年代以降、突厥第二可汗国あるいはウイグル可汗国のもとで刻まれたものと推測するほかはないのである。

しかしながら、白・包両氏が指摘するように、突厥文字・古代トルコ語の史資料が陰山山脈の北麓で発見されたこと、すなわち、突厥碑文あるいは漢籍史料で黒沙カラ=クムと呼ばれる突厥第二可汗国の本拠地に地理比定される地<sup>(5)</sup>で発見されたことは、古代トルコ系遊牧民史上きわめて重視すべき事実である。それはこの周辺に所在する考古遺跡の存在に鑑みての評価であるが、以下、近年明らかになった遺跡の情報と筆者の現地調査の成果をあわせて検討することにする<sup>(6)</sup>。

## (2) 陰山山脈の石人伴出遺跡

後にこの銘文が発見されることになる、ダルハン・モーミンガン聯合旗に散在する考古遺跡を1980年から1983年にかけて踏査したのが蓋山林氏である。氏はその報告論文〔蓋1991〕のなかで古代トルコ時代に属する遺跡も紹介しているが、地名のなかには今日すでに改編されてしまったものが多く、

(5) 黒沙の地理比定については拙稿〔鈴木2011〕を参照。なお、拙稿とは別に〔白・包2012〕も銘文の存在を証拠のひとつとして黒沙南庭の地理比定を試みている。

(6) 遺跡の所在地あるいは遺物の発見地については、本章第(3)節の〔図4〕に一括して示した。

現行の地形図では再確認が難しいうえ、解説が附記されていない図版から本文の情報と考古遺物とを照合することも困難である。この状況は、2004年に刊行された『蒙古学百科全書——文物考古』（以下『百科』と略す）と、前掲『達茂旗』の写真図版によって改善を見ることとなった。そして、現地調査での知見を加えれば、少なくとも旗内の数カ所で石人あるいは古代トルコ時代の遺跡の存在を特定することができる。そこでまずは、ダルハン・モーミンガン聯合旗の石人伴出遺跡を紹介したい。

### ①百靈廟石人

現在、百靈廟鎮の草原文化館に収蔵されている2体の石人のうちのひとつである[写真1]。蓋山林氏の別著に収録されている内蒙古石彫人像一覽表<sup>(7)</sup>ではNo. 33に該当する石人であり、鎮の西南4 kmの艾不蓋河<sup>アイブカ</sup>東南岸にあったものと登記されている[蓋1996, pp. 204-210]。草原文化館のキャプションには百靈廟西南の煉瓦場が発見地とある。残念ながら



写真1：百靈廟石人  
 ダルハン・モーミンガン聯合旗  
 百靈廟鎮 草原文化館 所蔵  
 [2012年8月31日 中川原育子氏 撮影]

(7) この一覽表には蓋山林氏が内モンゴル自治区内で調査した44体の石像の情報が登録されている。そのうち28点は1993年に蓋志浩氏とともに調査・撮影したとあるが、本書には図版が掲載されておらず、詳細は所在地の地名と大雑把な形態についての情報を頼りに再確認してゆくしかない。また、その44点の中には、遼・太祖陵の石彫(No. 31)や、交脚椅子に腰掛けたモンゴル時代に由来する石像(No. 8, 17, 20, 21, 22, 29)も含まれている。さらに追跡調査を困難にするのは、学術報告がなされている遺物が13点と少ないことである。それぞれの情報の粗密も相俟って、この一覽表から古代トルコ時代の石人として直ちに認定できるものは多くはない。

これまで発表されてきた写真 [『百科』図版 p. 29 (達茂旗百霊廟西南石人) ; 『達茂旗』 p. 41] では石人の周囲に遺跡らしい痕跡はない。

2010年8月21日の草原文化館での実測値によれば [鈴木・齊藤 2010, pp. 33-34], 高さ 130 cm × 幅 37~40 cm × 厚さ 15~25 cm の方形石柱をもとにした石人であり, 上端から 50 cm をもちいて頭部のみを彫刻している。そこには目・鼻・口・眉毛・口髭の様子が明確に確認できる。意匠から判断して, 北モンゴルなどで確認される石人と同じく, 古代トルコ時代の遺物と推測できる。

②<sup>シンボラック=ソム ドムティ=ゴル</sup>新保力格蘇木 東大高勒石人

同じく百霊廟鎮の草原文化館に収蔵されている石人である [写真 2]。前掲した蓋氏別著の一覧表の No. 32 に該当する [蓋 1996, p. 209]。草原文化館での実測によると [鈴木・齊藤 2010, pp. 33-34], 高さ 78 cm × 幅 23~30 cm × 厚さ 15 cm の平板な石を用いて成形されている。目・鼻・口が確認され, 胴体部分には, 胸の下で右手に杯を持つ様子, 左手を腰にあてる様子, 前面の帯などが明確に彫られている。

元来, この石人が存在していたシンボラック=ソムは, 明安鎮の所在地であり, 百霊廟鎮から西に約 65 km に所在する。遺跡とともにこの石人が撮影された写真は『百科』で確認できる [p. 36 (宝力格蘇木石人) ; 図版 p. 29 (達茂旗新宝力格蘇木石人)]。この明安鎮の東南 500 m ほどに位置する丘陵地帯に, 現地の旅行地図などで「突厥石人墓」と称される遺跡が現存している。かつての状況を伝える遺跡の平面図は [蓋 1991, p. 328] の「図十 5. 哈



写真 2 : 新保力格蘇木東大高勒石人  
ダルハン・モーミンガン聯合旗  
百霊廟鎮 草原文化館 所蔵  
[2012年8月31日 中川原育子氏 撮影]

達笑突厥墓」に該当し、特に M 1 と M 2 がこの石人を伴出していた古墓であることがわかる。M 1, 2 とともにほぼ 500 cm 四方の正方形石囲い墓であり、それがふたつ隣接して長方形のマウンドを形成している。南側の M 1 の周囲三方にさらに一辺 600 cm の石囲いが確認でき、当初 600 cm 四方の埋葬遺跡が造営された後に、この 500 cm 四方の M 1, 2 が作られたのであろう。なお、この遺跡の周囲にも方形の石囲いが複数連接された古墓群を確認することができる。注意すべきは現在、この遺跡に③の遺跡から石人が 1 体運び込まれて安置されていることである [写真 3 b]。

バヤンズルフ=ソム ボランホダック  
③巴音珠日和蘇木 保羅忽洞石人

バヤンズルフ=ソム<sup>(8)</sup>は、シンボラック=ソム（明安鎮）の西北約 15 km に位置しており、西に烏拉特中旗と接している。この両旗の境界地帯にある、

写真 3 a : 巴音珠日和蘇木保羅忽洞石人  
かつての石人伴出遺跡の状況  
左=No. 2 右=No. 3 [蓋 1996]  
出典『百科』p. 37.



(8) このバヤンズルフ=ソムの中心から南約 1 km の地点に忽笑遺跡群<sup>ホショー</sup>があり、古代トルコ時代の石囲い墓が 20 基あまり確認できるという [蓋 1991, pp. 312; 『百科』p. 179]. それらの一部では発掘が行われ、鐙が出土している。遺跡の簡単な平面図や写真、出土した鐙の写真が [蓋 1991, pp. 328-330] に掲載されている。

『達茂旗』[p. 41]では<sup>ボラントルス</sup>宝倫点兒索と、[蓋 1996, p. 204]の一覧表(No. 2, 3)ならびに[蓋 1991, pp. 311-312]や『百科』[p. 37]では保羅忽洞と哈達特羅蓋と、それぞれ記される地に、古代トルコ時代の石囲い墓群が存在する。

この古墳群のなかでも保羅忽洞には、[蓋 1991]の図版[図十 1. 保羅忽洞突厥墓平面成図]の(1)で示される、3基の石囲い墓が列んでいる。このうちのM 1, 2と呼ばれる古墓に2対の石人が立っていたようだ[図十中図版(一) 1, 3, 5]。平面図によれば、いずれも300 cm四方の石囲い墓で、東辺に石人が立っていたことがわかる。それらを撮影したのが[図十中図版(一)]の石人(之一)と(之二)の写真である。より鮮明な写真が『百科』に掲載されているが[写真3 a]、ナンバリングが[蓋 1991]とは逆になっている。

3基のうち最も西南に位置する、柱状の石に彫られた背の高い方のM 1の石人(之一)は、写真の画質が悪く詳細は判然としない。しかし『百科』の記載によれば、高さ140 cmで、帽子を被り、眉毛と目鼻が隆起した表情で、右手を折り曲げた姿勢をとり、帯も彫られていたらしい[p. 37]。従って、この記述から[蓋 1996, p. 204]の一覧表のNo. 2の石人であったことが判明する。この石人については聴き取り調査をしても行方はわからなかった。

もう一方の背の低い方の石人は、蓋氏の一覧表のNo. 3に該当し[蓋 1996, p. 204]、古墓群の真ん中に置かれていたものである。この石人は、現在、シンボラック=ソムの遺跡[②のM 1, 2]に移動されており、その様子を撮影したのが[写真3 b]である。現地での実測によれば、高さ93 cm × 幅30～



写真3 b: 巴音珠日和蘇木保羅忽洞石人  
 ダルハン・モーミンガン聯合旗  
 新保力蘇木(明安鎮) 現存  
 [2012年9月1日 中川原育子氏 撮影]

35 cm × 厚さ 30 cm の円柱状の石人である [鈴木・齊藤 2010, pp. 33-34]. 現在では表面が風化してすっかり彫りが浅くなっているが、目・鼻・口の表情が確認でき、右手を曲げて胸の前で杯を持ち、左手を腰に伸ばしている様子を見て取れる。

④巴音珠日和蘇木 <sup>アドーテョロー</sup> 阿都楚魯廟石人

『達茂旗』[p. 41] にモノクロ写真 [写真4] が掲載されているだけで詳細は不明。その写真では鼻と口のラインと右手を折り曲げて胸の前で杯を持つ様子が確認できるのみである。この石人の詳細については、今後聴き取り調査をするなどして情報収集につとめたい。



写真4：巴音珠日和蘇木阿都楚魯廟石人  
出典『達茂旗』p. 41.

以上のように、新たに発見された突厥文字銘文の周囲に石人伴出遺跡を確認することができた。中央ユーラシアの草原考古学の成果によれば、石人を備えた石囲い墓は古代トルコ時代に属するものである。とりわけ北モンゴルを中心とする東部中央ユーラシアにおける石人は、突厥第二可汗国の元で7世紀末頃から8世紀前半期に作成されたと考えられている [林 2005, pp. 99-102]. つまり①から④までのダルハン・モーミンガン聯合旗の石人伴出遺跡は、突厥第二可汗国時代に造営されたものと推定できる。ダルハン=ソム銘文はこのように古代トルコ時代の遺跡が造営された地域に残されたものであるという点に留意しておきたい。

さて、拙稿 [鈴木 2011, p. 44] では、<sup>カラエクム</sup> 黒沙の範囲として、百靈廟を中心とする半径 50 km を推定しておいた。さらに広く陰山山脈のステップ地帯に沿って見ると、古代トルコ時代の遺跡がまだ散在している。例えば、蓋山林氏はダルハン・モーミンガン聯合旗の東に隣接する四子王旗（烏蘭察布市）の

石人について興味深い報告を残している。

⑤ <sup>ツァガンデルス</sup>查干得日森石人

発見地は四子王旗の東北に位置する<sup>バヤンソノクトニソム</sup>白音朝格図蘇木であり、陰山山麓の東端部分にあたる。蓋氏らの報告によれば [蓋・蓋 2002, p. 137; 『百科』 p. 60], この石人は灰白色の柱状の石に彫られており、サイズは高さ 190



写真5：查干得日森石人  
出典『百科』図版 p. 29.

cm, 幅 60 cm, 厚さ 20 cm で、顔面部分の上下は 33 cm, 幅 20 cm ほどであるという。興味深い点は、その顔貌が胡人のようであり、そして何よりソグド語の銘文が記されているという点である。『百科』には正面と背面の写真が2枚掲載されており [図版 p. 29 (四子王旗石人)], 石柱の上端に顔面が彫られていることが判る [写真5]。しかし、残念ながら銘文の判読には至らない。

もし判読に成功すれば、新疆ウイグル自治区の昭蘇県で発見された小洪那海石人以来のソグド文字ソグド語銘文が刻まれたものとなる。周知のように、ソグド語・ソグド文字銘文の存在によって示されるように、突厥における公用語は第一可汗国ではソグド語であった。それが第二可汗国の成立後に古代トルコ語・突厥文字の碑文が建立されるようになったのである [護 1976, pp. 123-127]。従って、この銘文付き石人は、中央ユーラシア草原における文字文化や石人の来歴を考察するうえで重要な史資料となるであろう<sup>(9)</sup>。

また、最近の考古学調査によって明らかになった陰山山脈の遺跡がある。

<sup>(9)</sup> 小洪那海石人の発見経緯や銘文解読については [吉田 1990; 大澤 1999; de la Vaissière 2010] を参照されたい。なお、この石人についてはユーラシア遊牧民における石人の発生時期などをめぐっての議論がある [林 2005, pp. 99-102]。

先ず<sup>バヤンノール</sup>巴彥淖爾市の烏拉特前旗からもたらされた石人ならびに遺跡である。

⑥<sup>エルデネボラック=ソム ハーラッグ</sup>額爾登布拉格蘇木 哈拉漢溝石人

烏拉特前旗文物管理所のパネル展示によると、2010年11月に発見された古墓群に立っている。所在地は烏拉山の北麓と<sup>ウリヤンス</sup>烏梁素海との間の草原地帯にある。現在、草原は開拓によって耕作地に変えられつつあり、この墓群もその過程で発見されたのであろう。『内蒙古自治区第三次全国文物普查新発現』（以下『内蒙古』）によれば、所在地周囲には十数基の石囲い墓があるようであるが、そのうちの1基に石人が埋め込まれていたという。

さて、同書掲載の写真によれば[写真6]、石人は赤褐色の石柱を用いており、地表から100cmほど露出しているようだ[『内蒙古』p.69]。その石柱の大部分に人面を刻んだもので、目・鼻・口の表現はトルコ時代の石人に等しく、口髭の表現もよく残っている。石人の後ろに方形の石囲いが見えているが、これも古代トルコ時代の特徴を示している。



写真6：查干得日森石人  
出典『内蒙古』p.69.

次に陰山山脈の中部に位置する烏拉特中旗の遺跡が報告されている。

⑦<sup>バヤンオラーン=ソム</sup>巴音烏蘭蘇木石人

2012年9月5日の現地調査で烏拉特中後聯合旗博物館を訪問したところ、中モ国境地帯のバヤンオラーン=ソムで発見されたという石人が1体展示されていた[写真7]。石人には、高さ130cm、幅32cm、厚さ24cmほどの平板な石が用いられている。肩の部分で上下に切断されているようだが、現在

は接着されて展示されている。この頭頂部から 48 cm ほどに楕円形の顔が形成され、目・鼻・口と口髭が彫られている。右手は腰の上で折り曲げて胸の前で杯を持っている。左手は正面で帯にかけている様子が見て取れる。この帯の下には刀が彫られており、また右腰では帯に革袋を吊り下げている。北モンゴルの石人の様式と同じである。

なお、この石人の他にもパネル展示があり、杭蓋戈壁<sup>ハンガイゴビ</sup>という名の草原で撮影された石人を伴出する石囲い墓の写真が掲示されていた<sup>(10)</sup>。

最後に、陰山山脈の西部に連なる支脈である狼山山脈の南麓で発見された石人を紹介したい。

### ⑧莫力格乞石人

北流黄河が支流を分かちながら東流をはじめる磴口県の沙金陶蘇木で発見された石人である。最初に公開されたのは拓本写真のみ、磴口県のものであるというほかには手掛かりがなかったが [蓋 1991, p. 330], 『百科』 [p. 263] では発見地が記されて、原物の写真も掲載されている [写真 8]。



写真 7：巴音烏蘭蘇木石人  
烏拉特中後聯合旗博物館所蔵  
[2012 年 9 月 5 日 著者撮影]



写真 8：莫力格乞石人  
内蒙古博物院所蔵  
出典『百科』 p. 263.

<sup>(10)</sup> 烏拉特中旗における遺跡についての学術的報告は未発表のようであるが、インターネット上では旗内の遺跡発見情報が配信されている。新華網の報道によると、この突厥石人墓については 2009 年 12 月から話題になっているようである [http://big5.xinhuanet.com/gate/big5/www.nmg.xinhuanet.com/zt/2009-12/27/content\_18645228.htm (2013 年 2 月 30 日確認)].

現在、呼和浩特市の内蒙古博物院で展示されているため、計測が実施できなかった。平らな板石を利用しており、くぼんだ目に眉と口鼻、口髭などの表現が観察できる。蓋山林氏の一覧表ではNo. 1の石人であり、両手で杯を捧げ持っていると記されているが〔蓋 1996, p. 204〕実際に観察してみると、右手で胴部が膨らんだ壺型容器をその円形の把手に指を入れるように持っており、左手は腰の下まで伸ばしているように見える。

### (3) 古代トルコ時代における陰山山脈

前節で紹介した関連遺跡①～⑧の発見地を地形図に示すと〔図4〕のようになる。

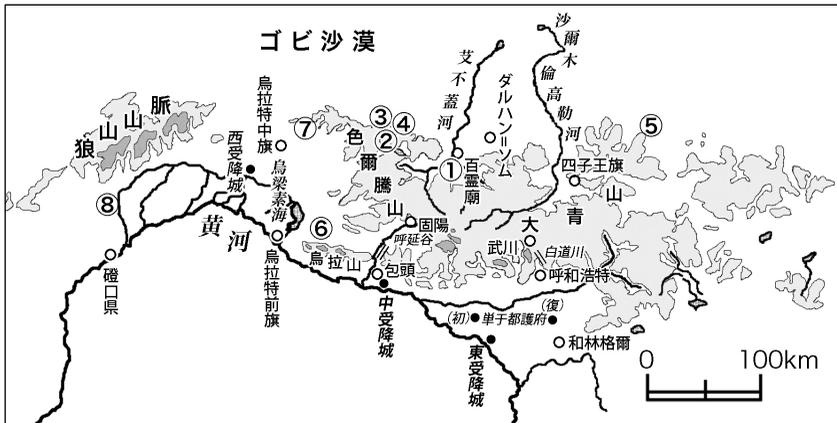


図4：陰山山脈関連地図

○＝現代の地名 ●＝唐代の関連遺跡

①～⑧＝本稿で紹介した石人伴出遺跡

地勢は『中華人民共和国地図集』[中国地図出版社、1996年]を利用した。

いずれも石人を伴出する古代トルコ時代の遺跡であるから、突厥第二可汗国に関連する考古遺跡や遺物が陰山山脈の山中から北麓にかけて分布していることがわかる。特にダルハン・モーミンガン聯合旗周辺の遺跡は山岳森林草原がゴビ沙漠に遷移してゆくステップ帯に位置している。上述の通り、拙稿

[鈴木 2011, p. 44] でも考察したが、黒沙の範囲として示した領域にも重なって分布している。鳥瞰すれば、陰山山脈の支脈である色爾騰山脈の東北麓と大青山山脈の西北麓に囲まれた一帯の、<sup>アイブカ</sup> 艾不蓋河中上流域がひとつの中心をなしているように見える。そして、それに附随して色爾騰山の西斜面、烏拉山の北麓地帯と烏梁素海の南岸で形成される草原にも遺跡が分布している。

ここで重要な点は、陰山山脈一帯で埋葬遺跡が造営されていたということである。これは陰山の草原地帯が生活空間として確保されていたとともに、トルコ系遊牧民の世代交代が行われていたことを物語っている。

これは文献史学の成果からも裏付けられる。突厥～ウイグル時代における象徴的な事例を列挙すれば以下のようなになる。

・突厥第一可汗国の啓民可汗以後、その滅亡まで、始畢可汗・処羅可汗・頡利可汗と 30 年近くに亘って陰山山脈に可汗の牙帳が置かれていた<sup>(11)</sup>。

・680 年代、突厥可汗国の復興がチョガイ山 (Čoγay yiš 陰山山脈) の北斜面あるいは「總材山<sup>(12)</sup>」で成し遂げられた。その後、そこから北モンゴルのオテケン山 (Ötökän yiš) への遠征が遂行された [cf. 鈴木 2006]。

・突厥第二可汗国 二代目可汗の默啜が陰山山脈に王庭である「黒沙南庭」を置くとともに、そこから華北に、あるいは後のマンチュリア (松漠方面) やソグディアナ方面にも遠征軍を派遣していた [cf. 鈴木 2011]。

(11) 平田陽一郎氏が北齊・北周と突厥間の政治状況を論じつつ、陰山地帯にあった定襄の重要性を指摘している [平田 2004, p. 5]。また別に第一可汗国末期における漠南の牙庭について述べた論考に [張 2007] がある。

(12) 碑文史料に記載された「チョガイ (チュガイ) 山」と漢籍に記録される「總材山」について、陰山山脈山中の地名であると推測したのは岩佐精一郎氏である [岩佐 1936, pp. 106-119]。その他の地理比定については、[Czeglédy 1962; Tezcan 1995] 等の専論がある。しかし、總材とチョガイ (チュガイ) の両者が音韻的に同定できるか否か等については未だ決着がついていない。詳しくは [鈴木 2008, p. 75, n. 9 & n.10] を参照されたい。

・第二可汗国末期に突厥の残党である「三纛突厥」が陰山山脈の黒沙方面に逃れてきた〔シネウス碑文・北面 8 行目／cf. 鈴木 2011, pp. 38-39〕。また、漢籍史料で第二可汗国滅亡後の突厥を指し示す「十二姓」〔鈴木 2006, pp. 7, 19〕と、ならびにチベット語の敦煌出土 P.t. 1283 文書で「トルコ系の突厥（原文はブク Chor 'Bug-chor）十二部」とか、陰山方面に存在したという証言〔森安 2007, p. 319, 328, 330-331〕。

・ウイグル軍を率いて安史の乱（755～763 年）に介入した、葛勒可汗こと磨延啜の息子・葉護<sup>ヤフグ</sup>が陰山山口の呼延谷を宿营地としていた〔シネウス碑文・西面 3～5 行目／cf. 森安・鈴木ほか 2009, pp. 75-76〕。

・キルギズの攻撃を被って南遷したウイグル可汗国の残党集団が、陰山山脈南麓にある振武城を求めつつ〔『会昌一品集』巻 5「賜回鶻可汗書」〕、840～843 年の数年間に亘り陰山方面で勢力を保持していた〔cf. 山田 1965；村井 2008, pp. 36-38〕。

もはや遊牧民による陰山地帯への滞在が一過性のものではないと言えよう。すなわち陰山地帯は北モンゴルの遊牧民がゴビ沙漠を縦断して通過するだけの場所ではなかったことを理解できるだろう。むしろ陰山山脈を確保することによって、その周辺地域の遊牧勢力を従えて拡大させてゆくような側面もみられる。突厥可汗国の復興がその典型例である。

周知のように、突厥やウイグルと言った古代トルコ帝国の時代、遊牧民の中心地は、北モンゴルのハンガイ山脈を中心とするオルホン河中～上流域やセレンゲ河流域、東方のトウラ河流域を含む一帯であり、そこはオテュケン山と呼ばれていた<sup>(13)</sup>。そして、これまでの先行研究は古代トルコ系遊牧民によって、そのオテュケン山が聖地として崇拝されていた点をしばしば強調してきた〔Gabain 1949, p. 36；山田 1951, pp. 62-65；林 2002, p. 126〕。ただし、

<sup>(13)</sup> 漢籍史料の突厥伝・ウイグル伝などでは於都斤山、鬱督軍山、烏德鞬山などと漢字音写されて伝えられている。考古学から見たその範囲は〔林 2002〕を参照。

突厥第二可汗国の状況については、おもに北モンゴルを占拠していた時代に、そこで成立した突厥碑文の記述に依拠するものであり、護雅夫氏によれば、古代トルコ遊牧民のナショナリズムを昂揚するための政治的な思惑がその背景にあったことが証明されている〔護 1976, pp. 126-127〕。特にキョル=ティギン碑文の枠組みのなかでは、立碑地たる北モンゴル・オテュケン山支配の正統性を喧伝するという政治的立場があり、第一可汗国時代に亡国の可汗たちが本拠地としていた南モンゴルについては積極的な記述をするわけにはいかなかったのである。

しかし拙稿〔鈴木 2011, pp. 44-50〕で示したように、突厥碑文を読み直すことで、たとえ南モンゴルにおける突厥の活動であっても具体的に復元することができる。つまり、北モンゴルのオルホン碑文からでも南モンゴルの陰山山脈が有していた重要性を検討することは可能である。そして一次史料を精査することで、本稿で試みたように、あるいは考古遺跡を追跡することによって、南モンゴルもまたトルコ系遊牧民の中心拠点をなしてきたという実態を浮かびあがらせることもできる。ここに、北モンゴルのオテュケン山すなわちハンガイ山脈に対して、南モンゴルの陰山山脈を中心とする草原地帯——チョガイ山や黒沙を含む——をもうひとつの古代トルコ時代の中心地とみなすことは十分に許されるであろう<sup>(14)</sup>。これは吉田順一氏が比較検討した「ハンガイと陰山」という匈奴以来の遊牧民族の歴史的な構図によっても〔吉田 1980〕、支持されるものと思われる。

ところで、小長谷有紀氏は北モンゴルに歴史地理的に存在した、そこを掌握することによって遊牧世界を支配し得た草原を「遊牧中原」と定義する。具体的にはモンゴル高原にふたつの騎馬遊牧国家の中心地——ハンガイ山脈

(14) Étienne de la Vaissière 氏より私信をいただき、氏が 2012 年 2 月にドイツのボンにおいて以下のような口頭報告を行っていたことを知った。曰く、7 世紀初頭の啓民可汗以降、680 年代の突厥第二可汗国の北モンゴル遠征に至るまで突厥の中心地が陰山山脈にあり、南モンゴルの陰山山脈が北モンゴルのオテュケン山にならぶ遊牧民の中心地であった、という。南モンゴルの地名比定など本稿に関わる議論に及んでいるそうであるが、これについては氏の論文刊行後に改めて論じたいと思う〔de la Vaissière 2013〕。ここに記して感謝の意を表するものである。

とヘンテイ山脈——を遊牧中原とみなしたのである [小長谷 1998] <sup>(15)</sup>。筆者はこの遊牧中原の概念を古代トルコ時代の状況に敷衍し、陰山山脈山ならびにその北麓を中心とする草原地帯を南モンゴル（陰山山脈）の遊牧中原と呼ぶことにしたい。そして、それに対して従来からトルコ系遊牧民の中心地とされてきたオテュケン地方を中核とする草原地帯を、北モンゴル（ハンガイ山脈・ヘンテイ山脈）の遊牧中原と呼びたい [図5]。

それでは、このように古代トルコ時代において南北モンゴルの遊牧中原を新たに措定する積極的な意味は何であろうか。近十数年来、「農業・遊牧境界地帯」という歴史空間の捉え方が提唱され、唐代史においても中央ユーラシ

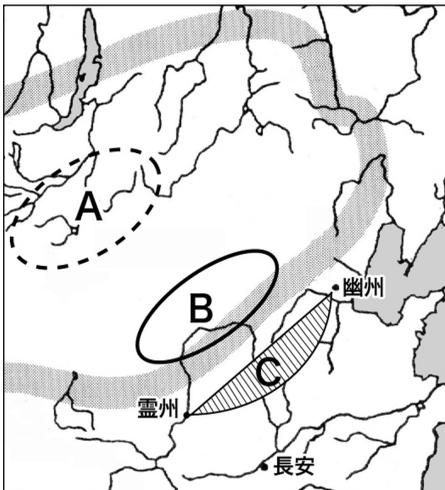


図5：南北モンゴルの遊牧中原概念図

- = 古代トルコ帝国の領域  
中央ユーラシア東部地域を  
中心に示した概況。
- A = 北モンゴルの遊牧中原  
ハンガイ・ヘンテイ山脈を包含。
- B = 南モンゴルの遊牧中原  
陰山山脈を中心とする草原地帯。
- C = 農業・遊牧境界地帯  
幽州から靈州に至る範囲を  
強調して示した。

(15) 小長谷氏は、ハンガイ山脈を中心とした遊牧中原をオルホン文明が涵養された「第一遊牧中原」とみなし、ヘンテイ山脈のそれをケルレン文明が育まれた「第二遊牧中原」と考えている [小長谷 1998, pp. 37-39]。突厥時代／古代トルコ時代からモンゴル時代へと段階的に移行する歴史空間の変化に着目された構図は卓越した見解だと思われる。ただし、古代トルコ時代の具体像については、近年の考古学の成果に鑑みて補足すべき点もある。北モンゴルの遊牧中原については稿を改めて論ずることにしたい。

ア史においても注目を集めている<sup>(16)</sup>。そこで、具体的にユーラシア東部地域における農業と牧畜が混濁した地域を示すならば、西は甘肅省の河西回廊から黄土高原、オルドス南部、山西省を経て、北京の東北方を貫いてマンチュリアにつながってゆく、北緯 40 度前後にひろがるベルト状地帯という理解が共有されていると思われる [cf. 妹尾 2001, pp. 30-34; 森安 2007, pp. 59-62]。ここで、そこから想起される古代トルコ時代の象徴的な事件をひとつ挙げるならば、630 年の第一可汗国崩壊後、唐帝国の太宗・李世民によって突厥遺民が「幽州から靈州に至る」地域において<sup>(17)</sup>、すなわち黄河大屈曲部のオルドス地帯から山西省北部にかけて羈縻支配されるようになったことである。ここは後に、阿史那思摩が黄河を越えて突厥の故地で遺民を統率する任務に失敗した後、再び彼らが生活することとなる場所であり [cf. 鈴木 2005, pp. 57-60]<sup>(18)</sup>、また最盛期の第二可汗国に迫られた九姓鉄勒の集団が移住してきた場所でもある<sup>(19)</sup>。このように唐帝国の騎馬遊牧民に対する影響力が行使される場所としてもみなしうるのであるが、この農業・遊牧境界地帯に直接

(16) 妹尾達彦氏に代表される見解であり [妹尾 2001, pp. 30-34]、中国史の文明論的展開を分析する段階から、近年ではアフロ・ユーラシア世界史の規模で議論の有用性が問われている [ex. 妹尾 2006, pp. 153-163]。なお「農牧接壤地帯」とも呼ばれる [cf. 森安 2007, pp. 59-62]。

(17) 『旧唐書』巻 194 上、突厥伝上に、「太宗遂に<sup>(編譯)</sup>其の計を用い、朔方の地に於いて、幽州より靈州に至るまで、順・祐・化・長四州都督府を置き、また頡利の地を六州に分ち、左に定襄都督府を置き、右に雲中都督府を置き、以て其の部衆を統べさしむ」とある [中華書局標点本, p. 5163]。この六州については議論が分かれているが [岩佐 1936; 章 1955; 石見 1986]、突厥遺民が安置されたという幽州から靈州に至る範囲が、おおよそ農業・牧畜境界地帯に重なっている点を強調しておく。再度 [図 5] を参照されたい。

(18) 唐朝に帰順し唐国内で墓誌を残した阿史那思摩夫妻や阿史那感徳といった突厥王族の経歴が「陰山人」から語られているのは、同時代のトルコ系遊牧民の帰属意識をうかがわせ興味深い。前者のテキストは、『昭陵碑石』[咸陽、三秦出版社、1993 年] の pp. 12-13, 112-114 を、後者は [趙 2009; 齊藤 2011] を参照のこと。

(19) 開元 4 (716) 年、同羅・霫・回紇・僕固の 4 部族が河東地域に帰順してきた事件を指す。山下将司氏が、たとえ唐の軍鎮体制下に編入されていても、遊牧民固有の形態を保持し続けていた例として採りあげている [山下 2011, pp. 4-5]。

遊牧民を送り出したのは、他ならぬ陰山山脈の遊牧中原であったと考えて間違いないのである。すなわち古代トルコ系遊牧民を扱うに際しては、南北モンゴルの遊牧中原の関連性を把握してはじめて、その動態をより精確に見極められると言えるだろう。

以上の議論に関連して、中国における歴史学界でも「長城地帯」という呼称で農業と遊牧が混じり合うこの地域の役割について論じられるようになってきている<sup>(20)</sup>。そこで議論を単なる中国王朝の辺境防備体制論にとどまることなく、さらに進展させるために必要なのは「長城」が各時代において動的であるという前提であり、それを実証することでもあろう。なかでも史念海氏は唐代の長城を、原州から慶州・夏州・麟州を結ぶラインとし[史 1987, pp. 89-90]、唐代前半における北辺防衛ラインについては、三受降城を「第一線」、塩州・夏州・麟州を「第二線」、延州・原州・慶州を「第三線」とする戦略が想定されていたものと分析している[史 1985, pp. 22-23]。三受降城の設置された地域は陰山山脈の南麓にあたり、特に西受降城については今回紹介した遺跡に至近である<sup>(21)</sup>。あるいは前代、鮮卑・拓跋国家による六鎮、征服王朝時代の長城ライン、そしてモンゴル時代の王府など、併せて考えるべき題材が陰山山脈には数多く存する<sup>(22)</sup>。遊牧中原をなす陰山山麓の考古情報が要請される所以である。

---

(20) 代表的な論考として論著として[李 2008]がある。また突厥の復興に関して長城地帯の果たした役割を強調する[朱 2012]も参照せよ。

(21) 三受降城については、唐朝の対突厥边防政策という観点から文献学的な論考がある[cf. 李 1995; 艾 2008]。一方、考古学的側面からの報告として、東受降城については[石・劉 2004]を、中受降城については[張 1991; 劉 1994; 陳 2013, pp. 62-68]、西受降城については[王 1989; 趙 1993]を挙げることができる。

(22) 農業・牧畜境界地帯に生成された秦漢代の境域「河套」地域を自然環境・考古資料・文献史料から描きだした[黄 2013]は、定住農耕民側の軍事施設を追跡しており、陰山山脈の歴史空間の復元にも参考になる。

## 5. おわりに

本稿は新発見の突厥文字銘文を改めて紹介し、そのテキストを修訂した。また、その所在地である陰山山脈の歴史的な位置付けについて、おもに考古遺跡の分布に着目しつつ考察してきた。そして、古代トルコ時代における歴史空間として「南モンゴル（陰山山脈）の遊牧中原」という分析視角を提起したものである。筆者の見解はまだほんの一点の突厥文字銘文を手掛かりとして、十指にも満たない石人伴出遺跡を根拠に抽出された試論の段階である。従って、陰山山脈における考古遺跡の情報を集積分析することが第一の課題となる。また本稿では検討が及ばなかったが、マンチュリア方面との関係を論ずるにあたって避けられない南モンゴル東部方面の史資料もまた考察すべき対象となる<sup>(23)</sup>。

なぜなら、3～4世紀にはじまる中央ユーラシアにおける民族移動の帰結が、古代トルコ族を巻き込みながらの南モンゴルと華北との統一であり、それが唐帝国の誕生であったという見解 [石見 2010, pp. 8, 13-15] に鑑みても、本稿で提起した南モンゴルの遊牧中原の果たした役割は大きいと考えられるからである。南モンゴルはゴビ沙漠を挟んで北モンゴルと、あるいは東北方面にマンチュリアと、また西方には河西回廊や青海なども交差する広がりをも有している。後の征服王朝の誕生やモンゴル帝国によるユーラシア世界の陸海域の統合などといった後代の変化を生み出す磁場として、あるいはヒト・モノ・カネ・情報の大動脈としての確たる役割を担っていたのである。

以上、ユーラシア史の展開を視野に入れつつ、南モンゴルの遊牧中原から農業牧畜接壤地帯にいかなる影響力が行使されていたか、あるいはこの遊牧世界の求心力がどのようなものであったか、また北モンゴルの遊牧中原との関係はどのようなものであったのかを具体的に究明してゆきたい。

---

(23) 陰山山脈の東方に位置する錫林郭勒盟の阿巴嘎旗、東西烏珠穆沁旗などでも石人伴出遺跡の存在が報告されているのは、蓋山林氏の『内モン古石彫人像一覽表』[蓋 1996, pp. 204-210] からも明らかである。しかし、それは2010年の再版でも情報に変化がないままである。これらを考古資料として利用するための情報収集と整理は喫緊の課題であると言えよう。

## 略号

- Бичээс II = Т. Осава, К. Сүзүки, Мөнхтулга, *БИЧЭЭС II*. Улаанбаатар, 2009. [大澤孝・鈴木宏節・R.ムンフトルガ『ビチェースII——モンゴル国現存遺跡・突厥碑文調査報告——』ウランバートル, 2009]
- ДТС = В. М. Надеяев et al. (eds.), *Древнетюркский словарь*. Ленинград, 1969.
- ED = G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford, 1972.
- GOT = T. Tekin, *A Grammar of Orkhon Turkic*. (Uralic and Altaic Series 69), Bloomington / The Hague, 1968.
- OTG = *Orhon Türkçesi Grameri*. (Türk Dilleri Araştırmaları Dizisi 9), Ankara, 2000.
- VWTD = W. W. Radloff, *Versuch eines Woerterbuches der Tuerk-Dialecte*, I-IV, St. Petersburg, 1893, 1899, 1905, 1911. [Rep. in 's-Gravenhage, 1960]
- 『百科』 = 蒙古学百科全書編輯委員会・《文物考古卷》編輯委員会 (編) 『蒙古学百科全書——文物考古』呼和浩特, 内蒙古人民出版社, 2004.
- 『達茂旗』 = 孟克德力格爾 (編) 『達爾罕茂明安聯合旗歷史文化遺跡』呼和浩特, 内蒙古人民出版社, 2010.
- 『内蒙古』 = 内蒙古自治区第三次全国文物普查領導小組辦公室 (編) 『内蒙古自治区第三次全国文物普查新發現』北京, 文物出版社, 2011.

## 参考文献 (著者名ABC順)

- 艾 冲 Ai Chong  
2008「論唐代“河曲”内外駐防城群体的分布及其对北疆民族關係的作用」『唐史論叢』10, pp. 131-146.
- 白 玉冬・包 文勝 Bai Yudong & Bao Wensheng  
2012「内蒙古包頭市突厥魯尼文查干敖包銘文考釈——兼論後突厥汗国“黑沙南庭”之所在——」『西北民族研究』2012-1, pp. 78-86, 99.
- 包 文勝・哈斯巴特爾・白 玉冬 Bao Wensheng & Hasibateer & Bai Yudong  
2010「内蒙古境内発現突厥盧尼文石碑」『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』2010-5, p. 152.
- Bazin, L.  
1982 “Note de toponymie turque ancienne”, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 36-1/3, pp. 57-60.

陳凌 Chen Ling

2013 『突厥汗国与欧亚文化交流的考古学研究』上海，上海古籍出版社。

Czeglédy, K.

1962 “Čoray-quzı, Qara-qum, Kök-öng”, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 15-1/3, pp. 55-69.

Gabain, A. von

1949 “Steppe und Stadt im Leben der ältesten Türken”, *Der Islam* 29-1, pp. 30-62.

蓋山林 Gai Shanlin

1989 『烏蘭察布岩画』北京，文物出版社。

1991 「內蒙古百靈廟一帶突厥遺迹初探」張志立・王宏剛（主編）『東北亞歷史與文化：慶祝孫進己先生六十誕辰文集』瀋陽，遼瀋書社。[再録：『蓋山林文集』哈爾濱，黑龍江教育出版社，1995, pp. 725-761]

1996 『絲綢之路草原民族文化』（絲綢之路研究叢書8）烏魯木齊，新疆人民出版社。[再版：『絲綢之路草原文化研究』（絲綢之路研究叢書）烏魯木齊，新疆人民出版社，2010]

蓋山林・蓋志浩 Gai Shanlin & Gai Zhihao

2002 『內蒙古岩画的文化解讀』北京，北京圖書館出版社。

林俊雄 Hayashi Toshio

1999 「第5章 草原世界の展開——中世の中央ユーラシア」藤川繁彦（編）『中央ユーラシアの考古学』（世界の考古学⑥）東京，同成社，pp. 263-339.

2002 「遊牧民族の王権——突厥・ウイグルを例に——」網野善彦（ほか編）『岩波講座 天竺と王権を考える 第三卷 生産と流通』東京，岩波書店，pp. 115-139.

2005 『ユーラシアの石人』（ユーラシア考古学叢書）東京，雄山閣。

平田陽一郎 Hirata Yōichirō

2004 「突厥他鉢可汗の即位と高紹義亡命政權」『東洋学報』86-2, pp. 1-34.

黄曉芬 Huang Xiaofen

2013 「秦漢帝国北方辺境の歴史空間」『東亜大学紀要』17, pp. 5-16.

岩佐精一郎 Iwasa Sēichirō

1936 「突厥の復興に就いて」和田清（編）『岩佐精一郎遺稿』東京，岩佐傳一（発行）pp. 77-167.

石見清裕 Iwami Kiyohiro

- 1986 「唐の突厥遺民に対する措置」『中国社会・制度・文化史の諸問題』（日野開三郎博士頌寿記念論集）福岡，中国書店，[再録：『唐の北方問題と国際秩序』東京，汲古書院，1998，pp. 109-147]
- 1992 「单于都護府と土城子遺跡」唐代史研究会（編）『中国の都市と農村』東京，汲古書院，pp. 391-424.
- 2010 「唐の成立と内陸アジア」『歴史評論』720，pp. 4-16.

小長谷有紀 Konagaya Yuki

- 1998 「地図でよむモンゴル」『季刊民族学』85，pp. 34-41.

Кормушин, И. В.

- 1997 *Тюркские Енисейские эпитафии. Текст и исследования.* Москва.

Кызласов, И. Л.

- 2002 *Памятники рунической письменности Горного Алтая*, vol. 1, Горно-Алтайск.

Кляшторный, С. Г.

- 2003 *История Центральной Азии и памятники рунического письма.* Санкт-Петербург.

de la Vaissière, Étienne

- 2010 “Maurice et le qaghan: à propos de la digression de Théophylacte Simocatta sur les Turcs”, *Revue des Études Byzantines* 68, pp. 219-224.
- 2013 “Away from the Ötüken: A geopolitical approach to the 7th c. Eastern Türks”, J. Bemmman & U. Brosseder (eds.), *The Complexity of Interaction along the Eurasian Steppe zone in the first Millennium AD. Empires, Cities, Nomads and Farmers*, forthcoming.

李 鴻賓 Li Hongbin

- 1995 「唐朝三受降城与北部防務問題」中国長城学会（編）『長城国際学術研討会論文集』長春，吉林人民出版社，[再録：『隋唐五代諸問題研究』北京，中央民族大学出版社，2006，pp. 110-129]
- 2008 「長城区域在唐史研究中的位置——從歷史学与民族学結合的角度觀察——」『中国少数民族史学研究』北京，北京図書館出版社，[再録：『唐朝的北方辺地与民族』銀川，寧夏人民出版社，2010，pp. 100-127]

劉 幻真 Liu Huanzhen

- 1994 「唐拂雲祠地望考辨」李逸友・魏堅（主編）『内蒙古文物考古文集』北京，中国大百科全书出版社，pp. 443-445.

劉 永連 Liu Yonglian

2012『突厥喪葬風俗研究』桂林, 廣西師範大学出版社.

羅 新 Luo Xin

2012「漢唐時期漠北諸游牧政權中心地域之選択」北京大学中国古代史研究中心(編)『輿地・考古与史学新説:李孝聡教授榮休紀念論文集』北京, 中華書局, pp. 641-649.

松田壽男 Matsuda Hisao

1944「漠南路——いわゆる「蒙疆」の歴史性について——」『歴史』19-1. [修訂再録:『松田壽男著作集 4 東西文化の交流II』東京, 六興出版, 1987, pp. 174-184]

護 雅夫 Mori Masao

1976「突厥可汗国における「ナショナルリズム」」『東洋史研究』34-4. [再録:『古代遊牧民族史研究II』東京, 山川出版社, 1992, pp. 98-132]

森安孝夫 Moriyasu Takao

2007『シルクロードと唐帝国』(興亡の世界史 05) 東京, 講談社.

森安孝夫・鈴木宏節・齊藤茂雄・田村 健・白 玉冬 Moriyasu Takao & Suzuki Kōsetsu & Saitō Shigeo & Tamura Takeshi & Bai Yudong

2009「シネウス碑文訳注」『内陸アジア言語の研究』24, pp. 1-92, + 12 pls.

村井恭子 Murai Kyōko

2008「九世紀ウイグル可汗国崩壊時期における唐の北辺政策」『東洋学報』90-1, pp. 33-67.

大澤 孝 Ōsawa Takashi

1999「新疆イリ河流域のソグド語銘文石人について——突厥初世の王統に関する一資料——」『国立民族学博物館研究報告別冊』20, pp. 327-378.

芮 傳明 Rui Chuanming

1998『古突厥碑銘研究』上海, 上海古籍出版社.

齊藤茂雄 Saitō Shigeo

2009「唐代単于都護府考——その所在地と成立背景について——」『東方学』108, pp. 22-39.

2011「突厥「阿史那感德墓誌」訳註考——唐羈縻支配下における突厥集団の性格——」『内陸アジア言語の研究』26, pp. 1-38.

妹尾達彦 Seo Tatsuhiko

- 1999 「中華の分裂と再生」『岩波講座 世界歴史 9 中華の分裂と再生』東京、岩波書店, pp. 3-82.
- 2001 『長安の都市計画』(講談社選書メチエ 223) 東京, 講談社.
- 2006 「中国の都城とアジア世界」鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人(編)『シリーズ 都市・建築・歴史 1 記念的建造物の成立』東京, 東京大学出版会, pp. 151-222.

石 俊貴・劉 燕 Shi Jungui & Liu Yan

- 2004 「准格爾旗十二連城出土の唐代墓誌与東受降城的地望」陳永志(主編)『内蒙古文物考古文集(第三輯)』北京, 科学出版社, pp. 513-516.

史 念海 Shi Nianhai

- 1985 「陝西省在我国歴史上の戰略地位」史念海(主編)『文史集林 第一輯』西安, 陝西省社会科学院. [再録:『河山集 四集』西安, 陝西師範大学出版社, 1991, pp. 1-74]
- 1987 「陝西北部の地理特点和在歴史上の軍事価値」史念海(主編)『文史集林 第二輯』西安, 三秦出版社. [再録:『河山集 四集』西安, 陝西師範大学出版社, 1991, pp. 75-144]

Stark, S.

- 2008 *Die Alttrükenzeit in Mittel- und Zentralasien -- Archäologische und historische Studien --*, Wiesbaden.

鈴木宏節 Suzuki Kōsetsu

- 2005 「突厥阿史那思摩系譜考——突厥第一可汗国の可汗系譜と唐代オルドスの突厥集団——」『東洋学報』87-1, pp. 37-68.
- 2006 「三十姓突厥の出現——突厥第二可汗国をめぐる北アジア情勢——」『史学雑誌』115-10, pp. 1-36.
- 2008 「突厥トニユクク碑文簡記——斥候か逃亡者か——」『待兼山論叢(史学篇)』42, pp. 55-80.
- 2011 「唐代漠南における突厥可汗国の復興と展開」『東洋史研究』70-1, pp. 35-66.
- 2013 「現地情報(1) 内蒙古編——漠南に遊牧民の足跡をもとめて——」『遼金西夏史研究会 NewsLetter』5, pp. 24-26.

鈴木宏節・齊藤茂雄 Suzuki Kōsetsu & Saitō Shigeo

- 2010 「現地情報(3) 内蒙古編——調査報告——」『遼金西夏史研究会 NewsLetter』3, pp. 25-35.

Tezcan, S.

- 1995 “Über Orchon-türkisch çuğay”, M. Erdal & S. Tezcan (eds.), *Beläk Bitig. Sprachstudien für Gerhard Doerfer zum 75. Geburtstag.* (Turcologica 23), Wiesbaden, pp. 223-231.

Тыбыкова, Л. Н. & И. А. Невская & М. Эрдал

- 2012 *Каталог древнетюркских рунических памятников Горного Алтая, Горно-Алтайск.*

王 北辰 Wang Beichen

- 1989 「内蒙古後套平原の幾個歴史地理問題——兼考西受降城——」『内蒙古社会科学』1989-5. [再録：『王北辰西北歴史地理論文集』北京，学苑出版社，2002，pp. 358-370]

王 博・祁 小山 Wang Bo & Qi Xiaoshan

- 1995『絲綢之路草原石人研究』(絲綢之路研究叢書 7) 烏魯木齊，新疆人民出版社。

王 世麗 Wang Shili

- 2006『安北与单于都護府——唐代北部边疆民族問題研究——』昆明，雲南出版集團公司・雲南人民出版社。

Васильев, Д. Д.

- 1983 *Корпус тюркских рунических памятников бассейна Енисея*, Ленинград.

山下将司 Yamashita Shōji

- 2011 「唐のテュルク人蕃兵」『歴史学研究』881, pp. 1-11.

山田信夫 Yamada Nobuo

- 1951 「テュルクの聖地ウトゥケン山」『静岡大学文理学部研究報告・人文科学』1, [再録：山田 1989, pp. 59-71]  
 1965 「9世紀ウイグル亡命移住者集団の崩壊」『古代史講座 11』東京，学生社。[再録：山田 1989, pp. 157-188]  
 1989 『北アジア遊牧民族史研究』東京，東京大学出版会。

嚴 耕望 Yan Gengwang

- 1985『唐代交通図考(一)』(中央研究院歷史語言研究所專刊 八三) 臺北，中央研究院歷史語言研究所。

吉田順一 Yoshida Junichi

- 1980 「ハンガイと陰山」『史観』102, pp. 48-61.

吉田 豊 Yoshida Yutaka

1990 「新疆维吾尔自治区新出ソグド語資料」『内陸アジア言語の研究』6, pp. 57-83.

章 羣 Zhang Qun

1955 「唐代降胡安置考」『新亞学報』1-1, pp. 245-329.

張 文生 Zhang Wensheng

2007 「東突厥建牙漠南小考」『中国辺疆史地研究』17-3, pp. 69-71.

張 郁 Zhang Yu

1991 「中受降城初探」『包頭文物資料』第2輯, [再録: 張海斌(主編)『包頭文物考古文集(下)』呼和浩特, 内蒙古大学出版社, 2009, pp. 550-553.]

趙 占魁 Zhao Zhankui

1993 「内蒙古後套平原古城考——兼与王北辰先生商榷——」『内蒙古社会科学』1993-4, pp. 59-65.

趙 振華 Zhao Zhenhua

2009 「唐《阿史那感德墓誌》考釈」『洛陽古代銘刻文献研究』西安, 三秦出版社, pp. 473-485.

朱 振宏 Zhu Zhenhong

2012 「突厥第二汗国建国考」『欧亚学刊』10, pp. 83-129.

【付記】本稿は、科学研究費補助金・基盤研究（S）「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究」[名古屋大学・嶋田義仁代表／研究課題番号 21221011] によるものであり、その研究分担者である名古屋大学・中川原育子先生のご支援を賜った。ここに末筆ながら深く謝意を申し上げたい。

また、本稿は、科学研究費補助金・若手研究（B）「突厥碑文の解読と関連遺跡の分析による南北モンゴル高原における遊牧中原の研究」[鈴木宏節代表／研究課題番号 25770257] による成果の一部でもある。

Summary:

## A Newly Discovered Old Turkic Inscription as the Evidence for the Location of Pastoral Nomads' Central Plain around the Yinshan Mountains

Kōsetsu SUZUKI

This paper will be focused on the Yinshan Mountains located in Southern Mongolia from the viewpoint of ancient Turkic nomads. In the ancient Turkic period (from the latter half of the 6<sup>th</sup> century to the latter half of the 9<sup>th</sup> century), it is a well-known fact that ancient Turkic pastoral nomads maintained and occupied the *Ötüken* Mountains identified as the Hangai Mountains situated in the center of Northern Mongolia. On the other hand according to the distribution of the ancient tombs with stone statue still extant around the Yinshan Mountains called the *Čoyay* Mountains recorded in ancient Turkic inscriptions, the steppe of the Yinshan Mountains which includes *Qara qum* ‘the Black desert’ recorded in Chinese and Turkic sources might be regarded as one of the centers of Turkic pastoral nomads.

The present author attempts to investigate the Turkic inscription called ‘Darhan sumu Inscription’ which was newly found from Southern Mongolia in 2010. This inscription is engraved in Runic script on the rock located nearly 2.5 km southeast of Darhan sumu, one of the north-central divisions of the Darhan Muminggan United Banner under the administration of Baotou City, Inner Mongolia of the PRC. The revised text by the author is as follows:

Transliteration: Y W R č i a b i t g m

Transcription: *yorčĭ a bitĭgim*

Translation: *Yorčĭ*. Oh! This is my own inscription (where my name is described).

This inscription was written by one of ancient Turkic nomads named *Yorčĭ*. It is an evidence to prove that Turkic tribes led a nomadic life settling around the northern slope of the Yinshan Mountains in Southern Mongolia and used the Turkic Runic script.